意味の記述

石黒昭博

言語とは音声と意味の相関関係から生じる体系である。したがって，言語の記述とは言語内の音声と意味の相関関係をのべることである。過去の文法家の手になる幾多の文法理論のいずれにおいても，包括的な意味の記述に成功したものはない。音声の記述の場合には，客観的観察が可能であり，各音声音は調音点，調音法，調音調整の違いをのべることで，その音のもつ特性をのべることもできるし，音の異同の一覧表を作成することも可能である。しかるに，意味の記述に関しては，音声の記述法に匹敵するいかなる記述法もいまだに見出されていないのである。

生成意味論の立場に立つ George Lakoff[1], James D. McCawley[2], John R. Ross[3], Emmon Bach[4], Charles J. Fillmore[5], Robin Lakoff[6], Robert I. Binnick[7], Jerry L. Morgan[8] らは文法記述の中に意味の記述を含めるために，古典的変形文法理論の修正を種々試みているが，その目的とするところは，終端記号が意味項目となるような記述法の発見であろう。このためには，文法は語彙レベルでの変形が行なわれる以前に生ずる変形によって，表層の語彙項目に意味項目を結合することが必要となる。この理論では，基底構造に現われる意味項目は当然従来のものと異なるから，従来のものとは異なった体系の中で表示されねばならないだろう。この項目は，いわば，意味項目であると同時に心理的項目でもあろう。本稿で意味表示とよぶものは，従来の文法で同じ名のもとによばれるものとは異なり，このような心理的項目であることをご承知おきいただきたい。

上にのべた意味項目は，果して Morgan[9] ののべるような意味での心理的項目なのだろうか。Morgan は心理的実体を含めないような意味論は不毛だとのべるが，Mary Gallagher はこれに反論し，不毛という時には，差異も類似もないことを指すのであり，言語的要素と心理的要素が無関係ということはあり得ないと論じている[10]。よしんば両者が同一のものだとしても，意味項目に含まれる心理的実体を検証することは必要なので，これは Edward Sapir が音素の分析に用いた種々の個別音素の検証法の如き方法によるべきだ，というのが Gallagher の意見である。

言語分析が意味を論じなければならない地点に達したら，他の学問分野の助力を借りねばならないというのは誤りで，Morgan もいう如く[11]，実はこの地点から真の言語学的分析が開始されねばならないのである。意味的根源に達した時にこそ，真の言語分析の目標が定まったといえるのである。意味的根源に達したかどうかは，検証によって判断されねばならないが，これも言語学的方法に準じて正当化されたものでなければならない。この根源で示されるものはあくまで仮説であり，現実世界に存在する通俗概念と一致する必要も，妥協する必要もない。

従来の意味表示の方法には，意味を形成する条件を列記したもの，定義と意味を同一視したもの，さらに，いわゆる意味表示というものがあるが，いずれも意味そのものを記述したものではないし，これらをいくらつきつめても意味の実体には肉迫できそうにもない。

まず，条件をくまなく列記することが可能かどうかを検討してみよう。動詞 *assassinate* という意味項目をとりあげてみる[12]。この動詞の意味を的確にのべるためには，*kill* という動詞の意味表示を示し，その上に，暗殺された人が政治的に重要な人物であるという前提，ないし条件をつけるという手続きが考えられる。この場合の条件の列記も数限りなく多種である。まず，条件を成立させる条件を設ける必要が起り得る。たとえば，政治的に「重要な」といっても，その重要さの度合が問題である。次の例文に従って考えて

ゆく。

(1) Robert Williams *assassinated* the Emperor of ADABA, whom he had never met before.

これは Robert Williams が ADABA 国皇帝に面識がなく，血族でもない場合には正しい文である。ところが，

(2) Robert Williams *assassinated* the Emperor of ADABA, who had been one of his best friends these ten years.

では，*assassinate* は不適であろうし，

(3) The Crown Prince *assassinated* the Emperor of ADABA last Saturday during the dance party at the palace.

という文では，皇帝と皇太子という血族関係が明らかである以上，*assassinate* という動詞は不適である。ところが，

(4) The Crown Prince joined the radical group and *assassinated* the Emperor.

という文は可能な文であることを見ると，(3)をめぐってのべたことも疑問となる。

また，暗殺という行為は，公共の場所，つまり，旅行中の滞在のホテルのロビーとか，劇場で観劇中にというような場所で行なわれる，政治的に重要な人物に加えられた殺人行為でなければならず，従って，

(5) Robert Williams *assassinated* the Emperor of ADABA on a rush-hour subway train this morning.

という文は，一国の皇帝がラッシュ・アワーの満員の地下鉄に乗るはずはまずないから不適な文である。

また，Morgan が指摘する如く[13]，殺人が暗殺になる場合には，政治的目

的をもって殺人が行われた場合に限られるから，次の(6)の文は正しい文だが，(7)，(8)の文は状況が暗殺という語は使うのにふさわしくない[14]。

(6) Robert Williams, a radical student, *assassinated* the Emperor of ADABA in order to induce a *coup d'état.*

(7) Robert Williams, a radical student, *assassinated* the Emperor of ADABA accidentally while trying to kill rats in his house.

(8) Robert Williams *assassinated* the Emperor of ADABA for cheating at the card game.

さらに，暗殺が行なわれる場合には，暗殺者の地位は，暗殺される者の地位より低いことが条件となる。従って次の(9)の文は正しいが，(10)の文は不適である。

(9) The Vice President of Republic of SUBUN *assassinated* the Emperor of ADABA.

(10) The Emperor of ADABA *assasssinated* the Vice President of Republic of SUBUN.

また，暗殺という時には，暗殺される者が即死するか，または，事件後一時は生きのびたが結局は短期間のうちに死ぬことが条件となろう。従って，

(11) Robert Williams assasinated the Emperor of ADABA by stabbing him just once.

は正しい文だが，

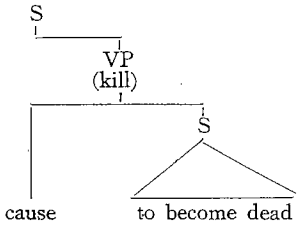
(12) Robert Williams assassinated the Emperor of ADABA by teasing him all through the last five years of his life.

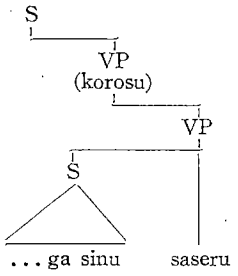
は先にのべた条件からいって不適な文である。

政治的地位の重要さの度合，社会的地位の高低，時間的・状況的条件など

の説明も，正しい意味記述を行なうためには，文法記述の中に加える必要がある。条件自体には問題がないとしても，その条件を作り出す条件をのべることは困難である。暗殺された人の「重要な」政治的地位といっても，どの程度「重要」なのか，暗殺が「すみやかに行なわれた」といっても，どの程度に「すみやか」なのかを完全にのべることは不可能事である[14]。以上のべたことは，あくまで現在の現時点における事実をのべる文を支配する文法を念頭においている訳だが，「現在」という時はさらに定義し難い概念である。現在における社会的地位の重要さ，人間の行為のすみやかさの尺度はあくまで暫定的なものであり，これらが急変することは充分考えられる。これは永久的事実を記述すべき文法が扱えるべき事柄ではないといえよう。過去の意味記述ではいずれもこの点までのべ得たものはなかった。語彙項目の特性を列記するモデル[15]といえども上にあげたような条件を記述するところまで範囲はのびていない。文が文法的，非文法的のいずれかを決定する一般的条件すらあげ得たものはない。

次に，いわゆる意味表示が単にある語彙項目のもつ意味内容の概略を与えるだけで，その核心に迫るものでないという点を考えてみる。こういった意味表示はやはり定義づけ以上のものではない。動詞 *kill* 及び「殺す」は，





のような構造をもつものと考えられるが[16]，これとて包括的な記述とはいえない。kill=cause to become dead, korosu=sinaseru という定式化は定義

づけに外ならない。包括的記述と定義づけとは似ても似つかぬものである。なぜなら，定義づけは，あるものを他のものと区別する特徴をのべるだけで，詳細にわたって実際的，現実的な事実を逐一あげている訳ではない。定義の対象になるのは，固定した世界に存在する事物だけであり，現実の世界は流動的なものであり，この流動的時相をとらえることはできない。また，定義というのは，その定義の与えられている言語を母国語とする人たちの直観力だけを頼りにしたものである。定義は説明を加えないで，種差を示すことで直観力に訴えるものだから，意味そのものを与えているのではない。定義は問題になっている事物を知るための手がかりを与えるにすぎない。手がかりから意味を察知するのは，それを示された人の能力に左右されることなのである。従って，定義という形で意味を表示することは意味の完全な表示とはいえない。しかしながら，意味表示がすべて定義の形式をとっているものではないし，包括的な意味記述は不可能である以上，定義によって種差をあげることは，意味の実体に一歩近づくことであろう。

また，意味表示が意味の概略的構図しか与えてくれないことは，ひとつの表示が与えられても，さらにその先の表示が要求され，それが得られても，またさらに先の表示が要求されるという手術きが続行され，果てるところがないということでも明らかである。例えば，

(12) John opened the door.

という文の意味として，

(13) John caused the door to became open.

が与えられ得ようが，さらに，(13) の意味として，

(14) John did something that caused the door to become open.

が説明として与えられ得る。しかし，これとて，説明としての領域を出るものではない。

以上の事例から得られる情報は，意味特性なるものは記述上必要なものであるとしても，意味そのものはそれを越えたものであるということである。意味表示が抽象的なものであるのは止むを得ないとしても，その抽象性が理論的構築の枠を越えたものであることが問題であるが，この意味では，あらゆる言語的表示は抽象的ならざるを得ない。この言語的表示を名詞句とか，文とかいった項目として扱うことに問題があるのであり，これは意味を形成する要素とは似て非なるものなのではなかろうか。意味を形成する要素は心理的実体と一致する必要はないし，それに，意味を形成する要素は独自の実体ではない。

意味表示が直接に与え得ぬものは，意味を形成する要素をいくつか集めたものを示すことによって，間接的に与え得るのではないかと思われる。ただ，この場合には，意味を形成する要素をいかに重要度に応じて見分けるかが問題となろう。この問題は，もし意味を形成する要素が心理的要素と同一のものであれば起こり得ない。意味を形成する要素（以下「意味要素」とよぶ）に与えられた名称の背後に心理的要素は秘められているのであり，その背後にあるものを確認しなければその実体はつかめない。

もし意味要素が言語理論上の理論的構築物にすぎぬとすれば，一種の辞書的意味表示に頼るだけでは解釈できない問題が生じる。意味を形成する要素はいくつかの異なった表層表示を生み出し得るし，異なった表層表示を生み出すための結合方法も異なるのである。そこで必要なのは，この結合方法ということになる。

仮に，先にあげた *kill, open* という動詞を含んだ基底構造の範囲で *do* と *cause* という二つの動詞を考えてみると，「～させる」という意味を表わすためには，いつも *cause* は *do* より上位にある動詞であることがはっきりしている[17]。この事実で，動詞 *cause* と *do*，ひいては動詞 *kill, open* との関係の違いは明白な条件として働く。少くとも，この作業で動詞の機能の違いは記述できよう。この作業はある意味ではきわめて思弁的ともいえるが，

(15) John caused the door to become open.

という文の意味は，言い換えることで説明し得るし，その極点は定義で解明し得る。いかに問いつめていっても *cause* の意味は，仮に意味要素に対応した辞書項目があれば，この動詞のもつ意味である「原因」を生み出す実例はいくらでも得られる。たとえば，

(16) He broke a glass.

は，

(17) He caused a glass to become broken.

で，

(18) She hardened the pudding.

は，

(19) She caused the pudding to become hard (or harder).

と言い換えることによって，動詞 *cause* の意味は判明しよう[18]。

このように，実例をあげることで，動詞 *cause* の意味要素は全貌を次第に表わしてゆくのである。このような作業，直観に基ずいた不可欠な作業が意味の記述に加えられるべきである。すると，*cause* を内蔵した文である

(20) Floyed broke the glass.

(21) The scientist hardened the metal.

の二文の基底に横たわる *cause* の意味要素が明らかにされて，これらの文に表われる動詞の意味が明らかになる。

構造上の特徴による記述を行なうことで，他の多くの問題も解決できることは，多くの文法家の指摘するところである。Jerrold M. Sadock は *ask* と *promise* という動詞に *often* という副詞が加わった文では，その本来の「行為的」意味が失われて，「いつも～する」という習慣的行為を意味することを指摘している[19]。また，Fillmore は前置詞のすべてを文法項目として扱うことに反対し，*in, on, under* の如き「位格」の前置詞は辞書項目として扱う

べきことを指摘している[20]。George Lakoff のいう如く，前置詞 *in* は動詞であるとすれば，*in* と *on* はまた切り離して考えねばならない[21]。

以上のべたことは，古くは Robert B. Lees[22] や Noam Chomsky[23] も暗示していることであるが，最近の McCawley の提示した，表層構造に現われる名詞句は，基底構造ではそれに対応する意味表示をもっていればいいだけで，その順序は必ずしも表層構造上の順序と一致しないという説[24] は，文の意味を説明する上できわめて重要な発言である。また，Fillmore は，語のもつ機能と話者・聴者の関係，心理的実体の映像化の過程，定義と意味の関係についてさらに深い洞察を示した研究[25] を進めている。

意味要素の記述はまだ始まったばかりで，定式化にはほど遠いといえよう。しかし，旧来の枠にとらわれることなく，言語的事実，論理的事実，心理的事実からひとつひとつの発見をつみ重ねることで，やがては意味の記述を完成する道程が一歩一歩究められるのである。

注

1 George Lakoff, *Irregularity in Syntax* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1970); "On generative semantics," in Danny D. Steinberg & Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics. An Inerdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology* (New York: Cambridge University Press, 1971); "Syntactic amalgams," Charles J. Fillmore et al. eds., *Berkeley Studies in Syntax and Semantics*, Vol. I, 1975.

2 James D. McCawley, *Grammar and Meaning: Papers on Syntactic and Semantic Topics* (Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1973) とくに同書中の "The role of semantics in a grammar" および "Meaning and the description of languages."

3 John Robert Ross, "On declarative sentences," Roderick Jacobs and P. S. Rosenbaum, eds., *Readiugs in Transformational Grammar* (Mass.: Blaisdell Company, 1968.)

4 Emmon Bach, "Nouns and noun phrases" in Emmon Bach & Robert Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory* (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1968.)

5 Charles J. Fillmore & Terence D. Langendoen, eds., *Studies in Linguistic Se-*

mantics (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1971) にはこの方面の論文が多く集められている。

6 Robin Lakoff, "Pluralism in linguistics," "Lingiustic theory and the real world" in Charles J. Fillmore et al., eds., *Berkeley Studies in Syntax and Semantics*, Vol. I, 1975.)

7 Robert J. Binnick, "On the nature of the 'Lexical item'" in *Papers from the Fourth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, (Chicago: University of Chicago, Deparment of Linguistics, 1068.)

8 Jerry L. Morgan, "On arguing about semantics," *Papers in Linguistics*, Vol. I, No. 1, 1969.

9 *Ibid.*

10 Mary Gallagher, "Does meaning grow on trees?" in J. M. Sadock & Anthony L. Vanek, eds., *Studies Presented to Robert B. Lees by His Students* (Alberta: Linguistic Research Inc., 1970.)

11 Jerry Morgan, *op. cit.*

12 Charles J. Fillmore, "Types of lexical information," *Working Papers in Linguistics*, No. 2, The Ohio State University, 1968. なお，以下の例文 (1〜12) は Mary Gallagher, *op. cit.* のものよりヒントを得たものである。

13 Jerry Morgan, *op. cit.*

14 日本語の動詞「暗殺する」の場合にも英語の assassinate の場合と全く同じ現象が見られる。

15 Jerrold Katz & Jerry A. Fodor, "The structure of semantic theory" in Jerrold Katz & Jerry A. Fodor, eds., *The Structure of Language* (New Jersey: Prentice-Hall, 1964.)

16 拙稿 Teruhiro Ishiguro, "Japanese Passive and Causative Constructions." 「人文学」第95号，同志社大学人文学会，1967。および，"A Study of Japanese Verb Phrase Embedding Constructions," *Doshisha Literature*, No. 25, English Literary Society of Doshisha University, 参照。

17 これは日本語の使役動詞「させる」の場合にもあてはまる。拙稿1967，1969参照。

18 George Lakoff, *Irregularity in Syntax, op. cit.*

19 Jerrold M. Sadock, "Superhypersentences," *Papers in Linguistics*, Vol. I, No. 1, 1969.

20 Charles J. Fillmore, "The case for case," in Emmon Bach & Robert Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory* (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1968.)

21 George Lakoff, *Irregularity in Syntax, op. cit.*

22 Robert B. Lees, "Review of Chemsky, *Syntactic Structures*," *Language*, Vol. XXXIII, No. 2, 1957.

23 Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* (Mass: MIT Press, 1965.)

24 James D. McCawley, *Grammar and Meaning, op. cit.*

25 Charles J. Fillmore, "The future of semantics, Charles J. Fillmore et al., eds., *Berkeley Studies in Syntax and Semantics*, Vol. I, 1975, およびカリフォルニア大学バークレイ校における1975年春学期の講義。

Synopsis

Description of Meaning

Teruhiro Ishiguro

Language is a system consisting of correlation between speech sounds and meaning. Therefore, a description of meaning must state the correlation between speech sounds and meaning. In the history of language study, numerous grammarians, classical, traditional and generative, have tried to define meaning in countless ways, but none has succeeded in his trial so far. The reason for this resides in the fact that speech sounds can be observed objectively and can be almost comprehensively described, whereas meaning cannot be observed and can only be explained subjectively.

Among generative grammarians, the people called generative semanticists, such as the Lakoffs, McCawley, Fillmore, Binnick and so on, have attempted to revise the so-called standard theory of Chomsky and to discover devices to include semantic description within their grammars. Their common aim seems to be a successful and adequate representation of meaning in such a way that the representation of terminal symbols is by itself the representation of semantic items before the transformation of lexical items takes place. Such items must be both semantic and psychological items.

Since linguistic primes and psychological primes are deeply correlated, it is a mistake to ignore the correlation and to separate the description of the two kinds of primes as different items. The true analysis must

be started at this point, being justified by a linguistic approach.

Previous studies in meaning have not been successful, because they were not able to present the reality of meaning : they simply itemized the conditions which constitute meaning, or ranked definition and meaning on the same level. The true meaning of the verb *assassinate*, for instance, can only be described when the semantic representation of the verb *kill* is shown and the numerous features of the person who is (was) assassinated are minutely manifested. These features should include his political position, the promptness of the action of assassination, the time and place of assassination and so on. They, however, might be too variable to be formalized. Examples (1—11) illustrate the above-mentioned difficulty.

Giving a definition is not identical with a comprehensive description of meaning. Definition only discriminates one thing from the other by giving differentia without explanation, and it heavily depends on the linguistic intuition of a native speaker of the language in which the description is given. It only gives a clue, and the detection of meaning from the given clue depends heavily on one's ability in the language.

Semantic representation is not to be given concretely as in a noun phrase or a sentence. What semantic representation cannot give directly might be given indirectly by showing a collection of semantic primes. Different ways of representation of semantic primes yield different surface structures, and the ways of combination also differ. The verbs *kill* and *open* in connection with the verbs *cause* and *do* are studied in order to examine this fact. "John opened the door" can be paraphrased as "John caused the door to become open." The meaning of *cause* can be given by showing a dozen examples in which *cause* is used, in contrast

with a sentence which does not contain *cause* but is of the same meaning. When such crypto-structures of each verb are manifested, the function of the verb will be manifested. Sadock's tiral on the verbs *ask* and *promise,* and Fillmore's analysis of English prepositions are attempts in this direction, and, although it is an extremely complicated and exhausting way, this will be the only linguistic model of semantic description in the future.